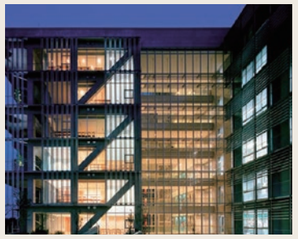
高齢社会を生き抜く建築

今、高齢者ひとりの戸建て住宅、借り手がつかないアパート、世帯主のいなくなった民家などにおいて、多くの部屋や家が余っている。今後高齢社会が進んでいく中で、建物はどうあるべきなのか。そもそも私たちにとって建築の役割とは何なのだろうか。

人間関係をはぐくむ建築

建築は人間関係に影響を与えます。建築の組み立て方によって人々の間に一体感が生じ、人間関係の基盤が作られることがあります。

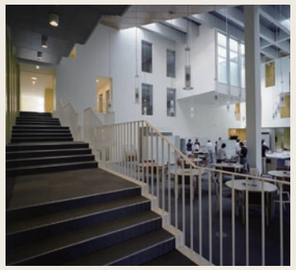
たとえば、私が設計に携わっていた、東京大学柏キャンパス環境棟。ここには、文系から理系まで幅広い分野の研究室が集まっているため、お互いにどんな研究をしているのか知る機会はなかなかありません。しかし、環境棟の部屋の入口は、すべてガラス張りになっています。ガラス越しに中の様子を少し見えることで、研究室の様子が感じられ、関心を持つきっかけを作っているのです。これが建築の力です。



環境棟の夜景
（撮影：（株）川澄建築写真事務所）

共に居ることの意味を追求

もう一つ、私が柏キャンパス内で設計したもので、数物連携宇宙研究機構（IPMU）の建物があります。IPMUは約半分が外国人の研究員というほど、世界中から宇宙に関する研究者が集まってきています。しかし、全員が個室に閉じこもって研究しているだけでは、ここ柏に集まる意味がありません。東京なりカリフォルニアなり、それぞれの研究者がそれぞれ都合の良い場所で研究するのと変わらないことになってしまいます。ここに集まって研究者が顔と顔を合わせて意見を交換することで、お互いに啓発し合い、素晴らしい思い付きに繋がればという思いがありました。



IPMU内部のホール（撮影：北嶋俊治）

IPMUの外観（撮影：北嶋俊治）

そこで、建物の中心に広いラウンジを設け、それを取り囲むようにらせん状に配列された研究室を配置しました。この機構では、毎日15時のお茶の時間があり、研究者はラウンジに集まってきます。ラウンジには数式がいっぱい書いてある黒板があり、研究者のあいだで自然に議論が始まります。こうして、研究者は個人の研究活動にアクセルをかけることができます。建築の形によって研究者同士が集まりやすいか集まりにくいかに影響を与えます。建築物にはそれぞれ、そこでの活動や居住する人々にとってのベストな解があります。それを探し出すのが建築家の大事な役割なのです。

日本が直面する問題 ―余る建物―

それでは、建築家はこれからも、よりよい人間関係を構築することだけを考えて建築物を作っていけばよいのでしょうか。

実は、今までと同じようにただ建物を作っていくというわけにはいかなくなってきています。なぜなら今、日本の社会が大きな変動期を迎え、これから建物が大幅に余るからです。

もともと日本は世界でも有数の建築消費国で、建物の寿命が短いと言われてきました。日本人には、30～40年経つと古いと感じ、建て替えてしまうことが多いのです。しかし、他の国においてはそうではありません。消費国として有名なアメリカでさえ日本の1.5倍ほど長く建物を使っています。また、日本とほぼ同じ気候であるニュージーランドは、木が育ちやすいが腐りやすいという条件も同じにも関わらず、木造住宅を200年～300年と使っているそうです。これは古いものを大事にするか、新しいものだけをありがたがるかという考え方の違いによるものです。

お金があったバブル経済期に、日本は建物をたくさん作りました。その建物が今、余り始めています。日本では人口がこれから急激に減少し、高齢社会がより進んでいきます。ますます人の住まないアパートや、高齢者一人の家で溢れることでしょう。

建築の革新 ―社会システム全体から考える―

そこで、今後は「建物＝新しく作る」という思考を転換し、なるべく新しい建物を作らないようにしていく方法を考えなければなりません。そのためには、今ある建物を再利用する必要があります。たとえば、今残っている建物を違う用途で使用したり、2つある建物を1つに合体させたりする方法が考えられます。

こうした方法を考えるにあたって、建築技術的に可能か検討することももちろん大切ですが、同時に社会のしくみを考慮する必要があります。たとえば、たいていの建物は誰かの持ち物であり、建物が変わると持ち主が複雑になるという問題があるので、そのあたりの制度を考えなくてはいけません。また、せっかく建物が長く使われても、公共交通が衰退すると、結局車を持たない高齢者は家に閉じこもって不自由な生活を送ることになります。そこで、公共交通網の充実や移動サービスの普及など、社会の仕組み全体を視野にいれて建物のあり方を考える必要があるのです。

今、建築に求められている人材

多くの科学技術分野では、1つの発見・発明により一気に進歩することがあります。一方で、建築など社会システムに関する分野は、気付かぬうちに徐々に変化していきます。しかしその中でも、誰かがアイディアを出さないと少しずつの変化も起きません。私は、明日すぐ実現するような技術ではなく、20年後、50年後の方向を指し示すようなビジョンを提示したいと思っています。

建築というものは、それ自身がひとつの芸術という側面もありますが、同時に社会的な器でもあります。私は、芸術家であると同時に、社会改革家でありたいと思っています。

教授　大野 秀敏

【所属】新領域創成科学研究科環境学専攻、工学部建築学科兼担
1972年 東京大学工学部建築学科卒業
1997年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了
1976年 株式会社槇総合計画事務所
1983年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻助手
1988年 同助教授
1998年 デルフト工科大学客員研究員
1999年より現職

ファイバーシティ「暖かい循環」
東京大学大野研究室